Ⅳ－195　　帝国ホテルの近距離精密写真測量

東京大学生産技術研究所　正員　丸安隆和
〃　〃　大島太市
〃　鈴木芳朗
〃　朝生郁三

1. 概　論

東京日比谷の一角をしめる帝国ホテル旧館は、昨年1２月から今年1月にかけてとりこわしが完了しその玄関ロビーの一部は、既に愛知県の明治村に運搬された。

此のホテルは近代建築巨匠であるフランク、ロイド、ライト氏の代表的作品として、４０数年前に完成され、国際的に著名で近代建築史上貴重な記念碑的作品といわれている。然しそのホテルの設計図は、ライト氏が帰国の際に持ち帰ったままで、日本には、その断片は数える程しかなく、特に建設中ライト氏が現場で設計図以外に直接指示してつくられた部分も多い。

ホテルの取りこわしが公表された後で、帝国ホテルを守る会は、正確なドキュメントを整備する必要上、写真測量による記録整備を急いだ。

今回、図化した結果から、ホテルが製作された最初の設計図と比較して、狂いが明確に分った事、再現のための測定ドキュメントとしても重要な役割を果すことが確認された。

写真測量の作業は、東大生研の丸安研究室と、東工大の平井研究室が中心となり、昭和４２年1２月初旬の２週間の短期日に、ホテル内外の必要と思われる箇所のステレオ撮影を行なった。

現在その一部の図面を作成中であるが、此の報告は主として、この帝国ホテルの解体前におこなった写真撮影、および、図化作業から眺めて、旧帝国ホテルの概要を述べる。

2. 写真撮影作業

写真撮影は、内外二班に別れて作業がおこなわれ、主として、東工大の班は外部、東大生研班は内部を担当した。作業は、1２月1日より、２０日までで、前半の1０日間は、東工大班で、延３５人の作業員で、９８組のステレオ写真の撮影をおこなった。東大生研班は、後半の1０日間で、延1０３名の作業員で、1９４組のステレオ写真を撮影した。

撮影カメラは、東工大班は、カール、ツァイス製、ＳＭＫ1２０のステレオカメラ1台、東大生研班は、カール、ツァイス製、ＳＭＫ1２０、1台、ＳＭＫ４０、２台のステレオカメラと、丸安研で、近距離精密用として開発した、ＩＩＳ型、ステレオカメラが使われた。

3. 図化、測定

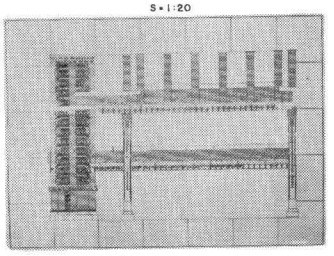
写真測量は、レンズを通して撮される被写体の中心投影像を幾何学的に再現して、立体観測により、作業者が、左右ハンドルと、足盤を使って図化測定をおこなうものである。

ホテルの図化、測定は、ウィルド社製の精密図化機、オートグラフＡ７が使われ、現在その作業中である。

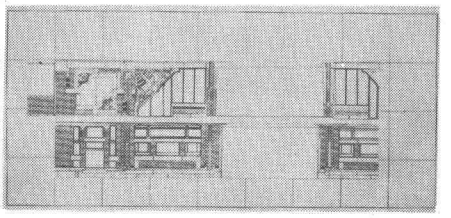
付属した写真及び、図面は、成果の一部である。

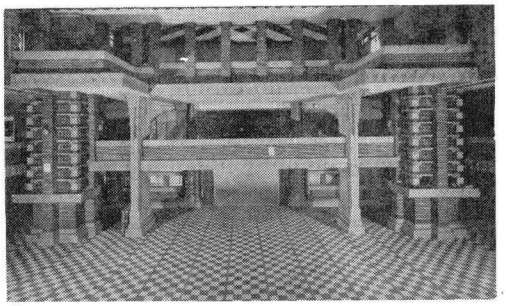
右図のNO.1, NO.2は、玄関ロビーの正面（東側面）を図化したものである。図化の縮尺は20分の1で、グリッドの1間隔が2mになっている。

THE IMPERIAL HOTEL BY F.L. WRIGHT
ROBBY EAST SIDE ELEVATION No. 1
S=1:20

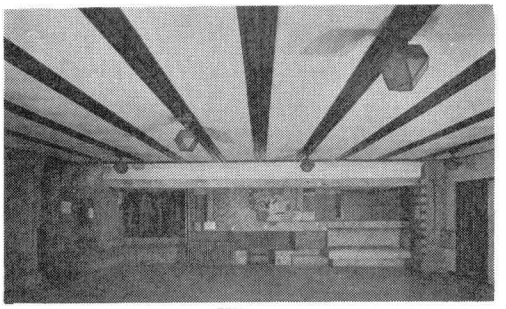


THE IMPERIAL HOTEL BY F.L. WRIGHT
ROBBY EAST SIDE ELEVATION No. 2
S=1:20

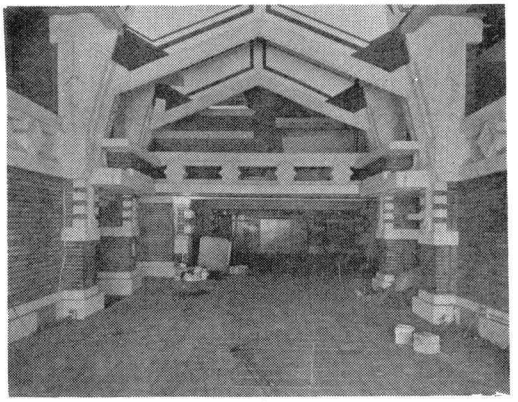




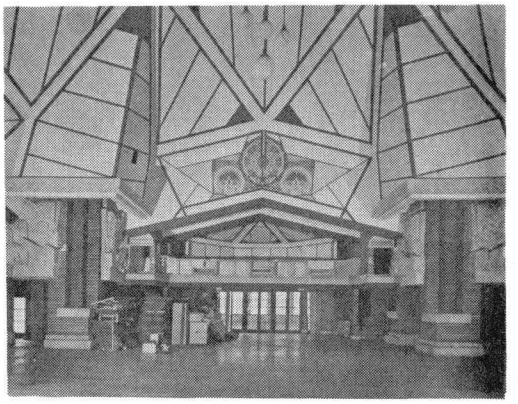
写真－1



写真－2



写真－3



写真－4

写真1, 玄関ロビーの正面（東面）で、大谷石の調刻とテラコッタのグリルブロックが、細かい装飾として使われ、なお正面奥には大食堂がある。

写真2, 室の間, の内部北面で、暖炉の上、大谷石のレリーフ（一部彩色）が見える、又左側が大食堂に面するバルコニーになっている。当室は、大事な客の為のラウンジで、貴賓室として作られた。

写真3, プロムナード、左右の客室棟と中心部とをつなぎ、談話室として使われた場所である。柱や梁には、大谷石の調刻が施され、ブロンズの照明器がとりつけられている。

写真4, 孔雀の間（大宴会場）、部屋全体が十字形をしており、中心部が高い天井になっていて、左右の柱の脇に孔雀の大谷石の調刻がつけられている、但し天井は、戦災にあい、最初とは少し異なる。

当室は、ホテル中で最も劇的な空間の場所となっている。